

国立大学法人 長岡技術科学大学  
平成23年度第3回(第41回) 経営協議会議事要旨

日 時 平成23年8月29日(月) 13時30分～15時50分  
場 所 KKRホテル東京「朱鷺」  
出席者 新原議長、東委員、江口委員、河野委員、齋藤(彬夫)委員、神野委員、宮下委員、山崎委員、武藤委員、高田委員、宮崎委員、三上委員、中村委員、齋藤(秀俊)委員  
(議事の表決の委任による出席者：池田委員、木谷委員)  
陪席者 平山監事、丸山監事、小松附属図書館長  
事務局 総務部長、総務課長、広報室長、財務課長、財務課副課長、財務課予算係長、専門職員(経営企画担当)、専門職員(企画調査担当)、総務係係長、総務係主任 以上 27名

議事に先立ち、第40回議事要旨(案)について説明があり、案のとおり承認した。

#### 審議事項

##### 1. 中長期成長戦略について

新原議長から、資料1に基づき説明があり、審議の結果、これを承認した。

主な質疑応答は、以下のとおり

- それぞれの大学や高専が、その個性をどう出していくかという事が非常に大切である。高専と技術科学大学は、同じDNAを持って生まれ特別な関係にあるという意識を、執行部、教職員、学生に持ってもらいたい。共同研究等を通じて連携の成果は上がってきてはいるが、十分ではなく、高専と技術科学大学は特別な関係にあつて、共同して教育研究をやっていくんだということを具体的に強く押し出す方法を考えてほしい。学生への広報も含め、学生に意識を持たせるためには、特別な交流を図ることが必要である。
- 高専との繋がりに関しては、高専学生やそのご両親を対象にしたもの、中学生やそのご両親、中学校の先生にも伝えていく広報等、いま具体的に動き始めているところである。また、本学で開催している高専との交流集会は、今年、新しい発想で企画し、以前より大勢の先生方や高専生、本学学生が参加され充実してきており、教員にも浸透し始めてきたと思っている。今後も更に進めていきたい。
- 技学と社会の関係を更に強化する方針を実行に移そうとしており、大変素晴らしい。一方で3月11日の福島原発事故により日本のみならず世界的な変革が余儀なくされており、原子力だけではなく産業構造そのものが変わっていくであろう中、本学は原子力システム安全工学専攻新設に向け動いてきているが、今後、原発問題がグローバル的にどうなるか予測は難しい。震災前と震災後でイノベーションを起こす戦略が大きく変わり、年度計画には反映できても、中長期戦略になると具体的なことを書くことは難しく、検討、考察を間違えないよう、かじ取りをして頂きたい。
- 原子力システム安全工学専攻の推進には大いに悩んだが、高専でも原子力人材育成プログラムに取り組んでおり、高専生へのアンケートでも長岡で原子力分野をやりたいという意識が高かった。しかも我々は、従来の原子力安全ではだめだという考えで進んできており、取り組むべきと考えた。

- 長岡ブランドがキーワードであり、特に若い卒業生を巻き込んだ形での社会への浸透・貢献を進めてほしい。広報では一般向けと専門家に対する広報を一本化してしまうと希薄になるため、分化し、整理していくことが、大学の存在価値のアピールに重要。長期ビジョンの実現のためには、教職員の意識にしっかり浸透深化させていくことが最も重要。

また、原子力に関する安全工学は、核燃料の廃棄の問題等が何十年と続く中で日本にとって絶対必要であり、そこに基盤を置いたものが確立されなければならない。海外では原子力発電に頼らざるを得ない国もあり、日本の産業構造が変わっても、原子力の技術を持ち、進める大学が必要。

- 重要なステークホルダーのひとつとして同窓会にも支援をいただき進めていきたい。卒業生の活躍を集めた広報や、いろんなかたちで進化させていきたい。これから「長岡技学ルネッサンス」という講演会をスタートするが、その中でも取り組んでいきたい。

高専・技術科学大学では、多くの学生が原子力分野に取り組もうという意識を持っており、高専・技術科学大学だからできるのではないかと考えている。

- 豊橋技術科学大学では20年先を考えた学部・大学院の再編ということで、昨年4月に8課程8専攻から5課程5専攻にした。課程専攻の再編というのは、教員の協力がないと全く進まず、教員に理解させるのがまず大事。高専との関係においても、30年以上経ってやっとこれから一緒に動いていける所に今立っているのではないかと思う。高専では今コアカリキュラムということが動いており、シームレスな教育という観点からいっても高専との協力が不可欠である。

- 高専連携室の高度機能化として、高専とどのように繋ぐか、お互いに融合しあうか、そこが高度化出来るかによって、大学の教育のあり方や研究のあり方が影響される。

相思相愛の広報を目指し、高専とはお互いに先生方、学生同士、我々と学生、我々と高専の先生の間で心の繋がりをひくような広報をしていきたい。

- 高専と技大の連携へのアプローチとして、技科大の先生が高専に行って講義、懇談するとか、学生向けのニュースを定期的に掲示するなど、個々の具体的な事をもっと積み上げることでより徐々に高専生に技術科学大学は特別の関係にあるという意識を持ってもらえるようになる。そのアイデアを広げて頂きたい。

- 高専との繋がりというのは、この広報がベストとか、この広報だけでいいということではなく、いろんな面からの地道な努力を積み重ねていくしかない。出前講義として昨年からの科研費の取り方の講演会を始めており、今年は6人の若手の教員を各高専に派遣した。高専との繋がりには非常に幅広いので、いろんな事を、多岐にわたってピックアップしながら、出来る事から地道に一つ一つやって、トータルとして連携が上手く繋がって心の中が繋がっていくように、あらゆる方面から進めていく。

- 卒業生を通じた連携と広報が有効。卒業生の活用がひとつの大きなキーワードになり、卒業生がいる企業を通じて会社の方々にも技大を知ってもらう事が大事。長岡技術科学大学が長岡にあるということが個性であり、県内の産業界、県、地方自治体、県内大学など地域の連携を深めてほしい。

- 技学を取り上げようとする、あらゆる学問が入ってくる。エンジニアリングでありイノベ

ーションであるためには、研究に対する見方を変えて、分野に分かれて「なぜ」を追っかけるのではなく、広く何に使えるのかという研究をしてもらいたい。何に使えるかを考えるには、学生への教育も工学の分野を広くやっていくような方策を考えないといけない。

- 構想としてはそういう形を考えていた。融合した領域で教育をとという話もあるが、少し時間がかかる。
- 産学連携は研究から教育へ軸を移してきたように思う。専攻学科の改組・再編やカリキュラムの組み直しは、非常に大変であり、概算要求もあり数年かかるが、現実的なやり方として、コースという考え方がある。長期的に20年を構えてやる専攻群と、時代に即した教育というのは組み合わせで出来る。全体の連携の中で科目を組み直すという作業が非常に大事で、その軸を決める指標は、卒業生に何を求めるかにつける。
- 先日の高専フォーラムでも工学系科目の相関等について検討が行われていると伺った。本学でも各系で相関がダブっている等あるので、その辺の整理が出来ないか努力しているところ。将来的には、そういうコンソーシアムが出来あがっていくのがベストという感じを持っている。

## 2. 寄附金の資金運用について（案）

宮崎委員から、資料2に基づき説明があり、審議の結果、これを承認した。

以上